温故知新⑪

■頭と五感の双方で考える

これまで、長く？ランドスケープ・デザインの仕事に関わってきて、私が「恩師」と尊敬している方はたくさんいらっしゃるが、そのなかでも実践的な「教え」を頂いたのは、荒木造園設計事務所を主宰されていた亡き荒木芳邦氏である。

荒木造園設計事務所は、大阪北部の池田市に本社事務所が位置している。池田市は「植木のまち」として知られ、市の北部の市街化調整区域には植木畑が続いているが、荒木造園設計事務所が位置する市の南部もかつては植木畑が広がっていたそうである。そのため、事務所から少し離れた場所の通称「山」にはラクウショウやセンペルセコイア等の植木畑があり、事務所の敷地にはフレームがあって、多くのグランドカバープランツを育成していた。私も夏は「山」の灌水、冬はフレームで「さし芽」のお手伝いもさせて頂いた。また、ちょうど「国際花と緑の博覧会」の花修景計画に関わることができたので、事務所の建物周りの「庭」の花卉類植栽・管理も仕事のひとつであった。

私は、ランドスケープ・デザインの基本は植物のデザインにあると考えている。形態も色彩も異なる植物を扱い、人に感動を与えるデザインを考えるためには、荒木造園設計事務所は申し分のない環境であり、多くのことを学ぶことができた。

こうした荒木芳邦氏の「教え」は植物を対象としているだけでなく、材料、空間構成など、ランドスケープ・デザインの全般に渡っていた。例えば、階段の蹴上げと高さを決定するため、何度も図面を書き直し、色々な場所で人の行動を観察して、荒木流の「快適な階段の構成」が決まってきたことも教えられた。

このように、ランドスケープ・デザインの基本は、「頭と五感の双方で考えよ」ということであったと今になって思い至る。植物の持つ香りや感触を見極め、人間行動観察を徹底するなど、デザイナーが頭と共に身体を動かして、デザインの「つぼ」を把握するという課程の実践は、まさに「温故知新」ではないだろうか。

宮前　保子
株式会社スペースビジョン研究所取締役所長。技術士（建設部門：都市及び地方計画）、農学博士
【経歴】1980年　京都大学大学院農学研究科博士課程修了。株式会社荒木造園設計事務所などを経て、1991年　株式会社スペースビジョン研究所設立。1998年より現職。
【主な仕事】国際花と緑の博覧会迎賓館庭園、奈良県上牧町文化ホール、ル・アーブル港日本庭園